

絃ノ道ニ極リケル人也、年來琵琶ヲ彈給ケルヲ常ニ聞テ、蟬丸琵琶ヲナム微妙ニ彈ク、而ル間此博雅此道強チニ好テ求ケルニ、彼ノ會坂ノ關ノ旨琵琶ノ上手ナル由ヲ聞テ、彼ノ琵琶ヲ極テ聞マ欲ク思ケレドモ、旨ノ家異様ナレバ不行シテ、人ヲ以テ内々ニ蟬丸ニ云セケル様、何ト不思議所ニハ住ゾ、京ニ來テモ住カシト、旨此ヲ聞キ、其答ヘラバ、不爲シテ云ク、

世中ハトテモガクテモスゴシテ、ミヤモワラヤモハテシナケレバ略下

〔江談抄長六事〕榮路遙兮頭已班、生涯暮兮跡將隱、侍大王万歳之風月、向後未必可知橋正道、梅近夜香多

此句七條宮宴序、自慊句也、滿座人無不拭淚、其後長去不知所之、或人云、復高麗國得仙云々、

〔大鏡右大臣師輔〕たふのみねの少將師輔高光の出家し給へりしほどは、いかにあはれにも、やさしくも、さまざまなる事どもの侍りしかは、なかにみかどの御消息つかはしたりしこそ、おぼろ

げならずは、御心もやみだれ給ひけん、かたじけなくうけ給はりし、

みやこより雲のやへだつおく山のよかはの軒はすみよかるらん、御かへし、

こゝのへのうちのみつねはこひしくて雲のやへだつ山はすみうし、はじめはよかはにすませ給ひしぞかし、後には多武峯にすませ給ひき、いとみじく侍りしことぞかし、されどもそれは九條殿、后宮などうせおはしましてのちの事也、

〔榮花物語凡一〕内侍のかみ藤原登子の御はらからの高光少將ときこえつるは、わらは名はまつを

さ君と聞えしは、九條殿のいみじう思ひきこえ給へりし君、中宮藤原安子の御事などもあはれにおぼされて、月のくまもなうすみのぼりて、めでたきを見たまひて、

かくばかりへがたく見ゆるよの中にうらやましくもすめる月かなとよみ給ひて、そのあかつきにいで給て、法師に成給にけり、みかど上村もいみぢうあはれがらせ給、よの人もいみじく

おしみきこえさす、多武峯といふ所にこもりて、いみじくおこなひておはしけるに、みつばかり